3. 幸福度に関する研究会報告 ―幸福度指標試案

大阪大学教授 内閣府幸福度に関する研究会 座長 山内 直人

私は、本業は経済学とか財政学ですが、 一昨年の12月に内閣府で幸福度に関する 研究会というのが立ち上がりまして、座 長を務めさせていただくことになりまし た。昨年12月には報告書が取りまとまっ ており、ホームページでもダウンロード できるようになっていますが、私の役割 は、そのエッセンスを15分間で紹介する ということです。前置きを言っていると



時間がなくなるので、いきなり本論に入りたいと思います。

まず、幸福度指標とは何かということですが、エッセンスだけ言うと、『幸福度を具体的に見えるようにさまざまな指標であらわしたものである』ということで、そういう指標の大系を想定しています。

個々人の幸福をある程度、地域、時系列で比較可能にした一種の物差しということで す。評価のためのツールとして使われることを想定しています。

幸福度指標とは何か?

幸福度指標とは何か?

- * 幸福度指標とは、幸福度を具体的に見えるように各種 指標で表したものである。
- * すなわち、個々人の「幸福」をある程度、地域、時系列で比較可能にした物差しであり、評価のためのツールである。

The same of the sa

背景

- * GDPを超えた指標である幸福度指標の作成が、日本だけでなく、欧州、北米、オセアニア、そしてアジアの国々で進んでいるという国際的動向。
- * 我が国においては、特に所得の増加にも関わらず主観的幸福感が低いという主観的幸福を巡る我が国固有の課題。

幸福度と言えば、最近はブータンを思い浮かべると思いますが、欧米でも、あるいは発展途上国でも、いろいろなところで幸福度の指標の作成が行われています。日本の場合は、先進国で1人当たり所得が高いにもかかわらず主観的な幸福感が低い、幸福を感じられていないのではないかという議論があり、そういったことも幸福度指標を開発する背景にあるのではないかということです。

幸福度指標をつくることにどういう意義があるのかということですが、「幸せ」に光を当てることによって、これまで政策などで焦点を当てられることが非常に少なかった「個々人がどういう気持ちで暮らしているのか」という気持ちの有り様に注目することだとこの報告書では考えています。

日本における幸福度の原因・背景・要因を探ることにより、国、社会、地域が人々の幸福度を支えるに当たって、いい点、悪い点、あるいは改善した点、悪化した点を明らかにすることができるのではないでしょうか。自分の幸せだけではなくて、社会全体の幸せ、幸福を深めていくためには、国、社会、地域がどこを目指そうとしているのかということを皆で議論する、そういう手がかりを提供することができるのではないか、ということを考えています。

政府が進める幸福度の指標作成作業ですから、政策との関係がどうなっているのかというのが当然問われるわけですが、実証に基づく政策に資するという観点から、指標によって明らかにされた事実に対して、政策の優先順位づけや政策の改善を提案することを促すことができるのではないか。人々の幸福度を高めているのか、阻害しているのかという観点から政策をレビューして、政策評価のもう一つの物差しとして指標を提供することが

幸福度指標作成の意義

* それは「幸せ」に光を当てることによって、これまで政策などにおいて焦点 を当てられることがなかった「個々人がどういう気持ちで暮らしているの か」という気持ちの有り様に着目することにある。より具体的には二つある。



- ✓ 日本における幸福度の原因・要因を探り、国、社会、地域が人々の幸福 度を支えるにあたり良い点、悪い点、改善した点、悪化した点は何かを明 らかにする。
- ✓ 自分の幸せだけでなく、社会全体の幸せを深めていくためには、国、社会、 地域が何処を目指そうとしているか、目指していくのかを皆で議論し、考 えを深めることが不可欠であり、その際の手がかりを提供する。



* 政策との関係では、実証に基づく政策立案(evidence-based policy-making)に資する観点から、指標によって明らかになった事実に対して政策の優先順位付けや政策の改良、新たな政策の提案を促すことに意味がある。

できるのではないか、そういう趣旨であります。

この研究会を実施している、まさにそのときに東日本大震災が起こりました。研究会の検討自体も一時中断したわけですけれども、そういう中で被災者の人々、あるいは被災地以外でも社会的に孤立した人々、あるいは日本に暮らす多くの人々が将来の希望や幸福を感じることができるようにするために何を優先すべきかということを検討するということで、この幸福度指標が役に立つのではないかというように考えて、検討を再開して報告を取りまとめたということです。

ですから、この報告書の中には、そういう非常に大きなまれにあるような大災害を想 定したときの幸福度の考え方も、一応インプリシットには入っているというようにお考え いただければと思います。

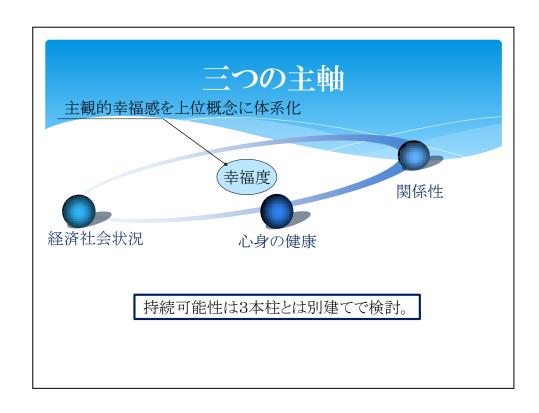
東日本大震災

*被災者の方々、社会的に孤立した人々、さらには日本に暮らす多くの人々が、未来の希望や幸福を感じることができるようになるために何を優先すべきかを検討するとき、当研究会において検討している幸福度の考え方や指標が政策立案の際に役立つことを願っている。

具体的に、どんなことを考えているかということですが、幸福度に、あるいは主観的な幸福感に影響を与えるような領域として、3つの主軸を想定しています。

1つは経済社会状況です。これは所得であったり、資産であったり、住宅であったりということです。それから2番目は心身の健康です。さらに3番目が関係性です。この3つの指標群、領域が、主観的な幸福感を決める上で非常に重要な役割を果たしているのではないかという整理をしています。





我々の検討の中で、主観的な幸福感を判断する上で重視する項目というのをアンケート調査等で見てみると、男女あるいは年齢層、つまりライフステージによってかなり違うのではないかということがわかってきました。

子どもとか若者にとっては友人関係が非常に重要です。それから大人になり、やがて結婚して家族を持つと、家計あるいは家族というものが最も重視されます。そして、だんだん年をとってくると、今度は健康が気になり、健康が最も重視されます。これは日本に限らないかもしれませんが、我々の研究会では、人口構造がどんどん変わっている日本においては、こういうライフステージ別に幸福度の指標を考えることが非常に重要なのではないかと考えました。

これまでにも、幸福度指標という名前は使われていなくても、いろいろな形でそれに 近い指標は、国レベルでも、自治体でも、民間でも公表されてきたわけですが、我々の考 えている幸福度指標というのは、主観的幸福感に影響を与えるような客観的な指標群とは どういうものかということを考えるということです。主観、客観というのは非常に相対的 なものですが、客観的と思われるものでも、よく見ると主観的なものが入っています。主 観的な幸福感を決める指標大系というものはどういうものかという考え方、そのような基 本的な考え方で作成するということであります。

ライフステージの違いを勘案して指標を 選択。

既存の統計でわかるものもありますし、わからないものもあります。今後の統計データの整備等も見通して、幸福度を決める上で非常に重要だけれど、現在は客観的なデータがないようなものについては、今後データ開発を行うことや統計整備を促すということを提案しています。

それから単一の指標であらわすことができるかどうかということについても、いろいろ議論があると思います。先ほどライフステージ別に見ると、主観的幸福感に影響を与える要素というのはかなり違うということがありました。それから、一国全体で平均して幸福度を見るということも、国際比較では大事であるかもしれないですが、一人一人幸福感のとらえ方というのは違いますし、極端に言えば家族の中でも、家族のメンバーのそれぞれがどういうふうに幸福感を考えるかというのは違うと思います。そこで我々の研究会では、単一の指標であらわすのではなくて、ブレークダウンしてみようという立場をとっています。ですから、一つの統合的な指標で幸福度を把握しようとしているのではないということです。

先ほど3つの主軸を想定していると言いましたが、具体的にどんな指標群を考えているかというと、まず、主観的幸福感、つまり3つの主軸で決定されると思われる主観的な幸福感について、いろいろなレベルで考えることができるのではないかと思います。

我々は、「あなたは幸福ですか」と聞かれたときに、無意識のうちに何かと比較しているということが多いと思いますが、それは自分自身の理想と比較しているのか、あるいは過去と比べて今の自分がどうかということを考えることもありますし、将来自分がこう

あるべきだろうというものと比較して今の自分を考えているということもあるかもしれません。日本人の場合にはよく、人並み感ということが言われますが、社会全体の中で自分が置かれているポジションを意識して幸福感を感じるかもしれない。あるいは、今までにどういう感情経験をしたかということも大事ですし、先ほど言いましたように世帯内の幸福度の格差という観点もあるかと思います。

主観的幸福感の具体的なはかり方としては、「あなたは非常に幸せですか、非常に不幸ですか」という設問を行い、回答を5段階か10段階のスケールで選んでもらいます。例えば10段階であれば、真ん中だと思う人は5に丸をつけ、真ん中より少し幸福感が高いという人は6とか7に丸をつけます。そうすると日本人は、大体5に丸をつける人が多く、それから7、8に丸をつける人が多くて、二こぶラクダみたいになっていると言われます。そのあたりは、日本人の人並み感というのも当然影響しているでしょうし、今自分が最も幸せなときだと思いたくないという意識が働いているという分析をする人もいます。つまり今が最高だと思うと、あとは落ちていくだけなので、もっと幸福になる余地があると考えたい、信じたいと思っているのではないかという解釈もあり得ると思います。

主観的幸福感

- ✓主観的幸福感
- ✓理想の幸福感
- ✓将来の幸福感
- ✓ 人並み感
- ✓感情経験
- ✓世帯内幸福度格差



次に3つの主軸のほうに移りますが、1つは経済社会状況、これは割と従来から考えられていたものが中心になるかと思います。

基本的ニーズ、住居、子育て・教育、雇用、社会制度というような分野が考えられる と思いますが、具体的な指標を提案しています。この縦のほうは先ほどのライフステージ に対応していまして、横が経済社会状況に関係する指標の領域です。例えば、最近ですと 子どもの貧困率が非常に注目されていますし、あるいはニート、仕事満足度とか社会活動 への参加率が入っています。

経済社会状況

- ✓基本的ニーズ
- ✓住居
- ✓子育で・教育
- ✓雇用
- ✓社会制度



経済社会状況の指標								
	基本的 ニーズ	住環境	子育で・教 育	仕事	制度			
個人·世 帯·地域	貧困状況、 他7指標	ホームレス数、 他7指標	学歴、他2 指標	望まない非 正規雇用率、 他3指標	制度への信 頼(政府)、 他4指標			
子ども・ 若者	子どもの貧 困率	子どもだけで 過ごす時間 がある子供 の数	学校生活満 足度、他4指 標	二一卜数、 他3指標				
成人	自己破産		子育で満足 度、他5指標	仕事満足度、 他5指標				
高齢者 数	自虐高齢者 数、他3指標			社会活動 参加率				
指標数	14	9	13	15	5			

それから2番目が心身の健康ということです。これは、いわゆる肉体的な健康だけではなくて、精神的な意味での健康というのも非常に重要なのではないかと考えています。 身体的健康、それから精神的な健康の具体的な指標群としては自殺、うつ、などが入っています。 あるいは身体精神に共通するような項目というのも掲げています。

心身の健康

- ✓身体的健康
- ✓精神的健康



心身の健康の指標例

		身体的健康	精神的健康	身体•精神共通
	個人·世帯· 地域	長期疾患率	自殺死亡者数、他 3指標	平均寿命、他3 指標
	子ども・若者	乳児死亡率、 幼児死亡率、 他1指標	子ども当たり児童 虐待数、他2指標	
	成人		うつ	DV認知件数、他 1指標
	高齢者数	日常生活動作(A DL)、他1指標	年齢別認知症発 症率	健康自己評価
	指標数	5	9	7

それから3番目が関係性です。これはライフスタイルとか家族とのつながり、地域等とのつながり、あるいは自然とのつながりということで、これは特に東日本大震災の後、つながり、家族とのきずなを非常に重要であると感じたという人が非常に増えています。しかし、平時においてもこういう関係性 — 社会関係、家族関係が非常に重要だと考えていまして、ライフスタイルから自然とのつながりまで、幾つかの指標を例示しています。



関係性の指標								
	ライフスタイ ル	個人・家族のつながり	地域・社会とのつ ながり	自然とのつな がり				
個人·世 帯·地域	自由時間、 他3指標	家族・親族、友人との 接触密度、他4指標	自己有用感、他7 指標	自然への畏敬、 他4指標				
子ども・若者	遊び、就学、 塾・習い事の 時間配分	孤独を感じる子ども の割合	ひきももり数、他3 指標					
成人	有給休暇取 得率	両親など近親者が近 隣にいない世帯	NPO, NGO, スポー ツ・趣味団体などの活 動への参加頻度					
高齢者数	手段的日常生 活動作(IAD L)	独居で、かつ親族が 近隣にいない世帯数						
指標数	14	9	13	15				

最後に3つの主軸とは少し別の次元だと考えていますが、持続可能性ということです。これは、我々が将来にわたって、我々の次の世代、次の次の世代まで考えるときに意識しておかなくてはいけないことで、これもやはり主観的幸福感に影響する要素だと考えています。いわゆる地球温暖化の問題であるとか、大気汚染の問題であるとか、あるいはそれを促すような消費者行動であるとか、企業の情報開示の問題も要因として考えられると思います。具体的な指標、それぞれの要素に対応するような具体的な指標を提案しています。

以上が、我々が考えている幸福度指標の考え方、それから具体的な項目の提案ということですが、こういう指標の中には全国規模で把握ができていないものもあって、先ほども言いましたように、主観的幸福感を決める上で不可欠なもの、不可欠であるにもかかわらず現在データが整備されていないようなものについては、我々がこういう



分野の統計データの整備が重要だということを提案することも必要なのではないかと思います。この研究会の報告書は昨年12月に出ましたが、それ以降、新しいアンケート調査等々も実施しようとしているところであります。

内閣府で我々が行っている幸福度に関する指標の検討、指標群の提案について、まず ご報告させていただきました。どうもご清聴ありがとうございました。

持続可能性

- ✓地球温暖化
- ✓物質循環
- ✓大気環境
- ✓水環境
- ✓化学物質
- ✓生物多様性
- √環境容量の占有量
- ✓消費者行動
- ✓企業などの情報開示



持続可能性の指標

- ① 地球温暖化:温室効果ガスの年間総排出量(家計部門は特記)
- ② 物質循環:循環利用率・最終処分量(生活系ごみは特記)
- ③ 大気環境: 大気汚染に係る環境基準達成率・都市域における年間30℃超高温時間数・熱帯夜日数
- ④ 水環境:公共用水域の環境基準達成率・地下水の環境基準達成率・バーチャルウォータ総輸入量(率)
- ⑤ 化学物質:PRTR対象物質のうち環境基準・指針値が設定されている物質等の環境への排出量
- ⑥ 生物多様性:脊椎動物、昆虫、維管束植物の各分類群における評価対象種 数に対する絶滅のおそれがある種数の割合・生物多様性指数
- ⑦ 環境容量の占有量:エコロジカル・フットプリント
- ⑧ 消費者行動:フェアートレード商品購入量・エコラベル商品購入量
- ⑨ 企業などの情報開示:CSR報告書を作成している企業数

把握されていない指標

- * 提案された指標群の中には、全国規模で把握されていないものもある。
- * 指標群が本来の目的である①国、社会、地域がどのような状況にあり、良い点、悪い点、は何かを明らかにすること、②その上で国、社会、地域が何処を目指そうとしているか、といった点を皆で議論し、考えを深めるためには、統計の充実が必要である。